

## 週日の説教

金 大烈 神父 2009年6月18日(木)

### 《人を赦すために、自分自身を赦してください》

今日の福音(マタイ 6・7 15)の『主の祈り』については、以前も、いろいろな角度から説教を申しあげました。今日の話は、反復するところもあると思いますが、感じ方は、毎日違いますので、もう一度申しあげたいと思います。

「赦せない」という言葉と同じ言葉は、「赦したくない」、ではないかと思えます。私たちが「赦せない」と言っているのは、結局「赦したくない」という気持ちですよ。だから「赦せない」ですよ。しかしイエスは、今日の福音でも、ものすごく厳しくおっしゃっていますね。「あなたがたが人を赦さなければ、天におられる神様も絶対あなた方を赦さない。」(あなたがたが人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの過ちをお赦しにならない)と。ですから、日本の主の祈りの訳は間違っていると私は何度も強調してきました。日本の訳では、「私たちの罪を赦してください。そうすれば、私たちも人を赦します。」となっています。「赦されたら赦します」というようなニュアンスがありますね。しかし、本当は、今日の福音のように、「私が人を赦したように私の罪も赦してください」という意味です。

とにかく、赦さなければならない相手を思い出してみてください。赦したくない人が、皆様の記憶の中にいますか？今の自分を見て、なぜ私はこのようになってしまったのかと考えるとき、思い浮かぶ相手がありますか？はっきり思い浮かばないと思います。もちろん、記憶に残るような、劇的な、小説のような生き方をして来た人ならば、そういう傷を与えた相手がいるかもしれません。しかし、普通の生活をする人々がよく口にする「赦せない」相手は、大体そんなに大きな罪を犯した人ではないと思います。何でも無いようなことで、何かの嫌な気持ちだけで、「あの人を赦したくない」と、すぐに言ってしまうのが私たちの癖の一つではないでしょうか。

「赦しあう」という言葉を思うとき、いつも最後にたどり着くのは、このような結論だと思えます。

そして、その赦さなければならない相手を考えるとき、最後には、必ず自分自身の顔が思い浮かびます。結局、私たちが人を赦すためには、まず自分を赦さなければならないのだと思えます。

皆様、ご自分について100パーセント満足できるでしょうか？このような性格で、このような生き方をして、私は本当に最高だった、と言える方がいらっしゃるでしょうか？この世の中には、いないと思います。なぜなら、私たちはいろいろな関わりに縛られているからです。純粋な、罪一つない人間として生まれても、いろいろな係わりによって、罪を犯しながら生きています。罪を犯してしまい、罪の意識に鈍くなってしまい、これは自分でなければよいのに、と思うことが必ずあります。私にも数えられないくらい、たくさんあります。皆様もそうだと思います。

神様に赦しを求めるために、イエスが今日の福音で強調しているのは、「私があなたを赦したのに、なぜあなたはあなた自身を赦さないのか。」ということです。言葉を変えてみますと、「私があなたを愛しているのに、なぜあなたがあなた自身を愛さないのか。」ということになると思います。

皆様、まことの反省、まことの回心、まことの悔い改めの一つは、自分を正しく見ることです。だいたい、人間は自分の姿を見ないようにしています。しっかり見てしまうと苦しくなるからです。しっかり見ると、「自分が気の毒で、腹が立って、耐えられない」、そういう気持ちになってしまうからです。しかし、一番基本的なことは、いつも自分を客観的に見ようということです。それができれば、赦すべきか、赦しをもらうべきか、求めるべきか、その答えを得られます。よく考えてみてください。だいたい私達は、人のことにはものすごく敏感です。しかし、自分のことには、何とか楽に乗り越えてしまおうとする傾向があると思います。

イエス様が今日の福音を通しておっしゃった、「誘惑に陥らせず」ということは、結局、自分を見ないから誘惑に陥るのです。正しい、ありのままの自分を見ることができれば、赦す方法も、赦しをもらわなくてはならないことも、そしてそれによって感謝することも自然に悟れると思います。

皆様、神様が(イエス様が)いつもおっしゃっているのは、私たちを愛していらっしゃる、ということです。それでは、そのような愛される私たちが、自分自身をどのくらい愛しているのか、それをよく考えてみますとやはり頭が下がるのではないのでしょうか。

皆様、自分を愛さない人には絶対、感謝の心や喜びは生じません。そして人を赦すこともできません。だから、今日のイエス様の、「私が赦したように、あなたも赦しなさい」という言葉に従えるように、まず自分のことをよく考えてください。自分で自分のことを本当に軽んじてしまったところまでよく考え、赦しを求めながら、自分を赦してください。その和解によって正しい目が開くことを私は信じます。

ありがとうございました。